

マイケルさんのこと

加山 久夫

本研究所が共同研究プロジェクトを活動の柱とするようになったいきさつについては、「研究所 35 年の歩み」(『紀要』35 号所収)に触れておきましたが、その一つとして「日韓のキリスト教の比較研究」という興味深いテーマを取りあげたことがありました。研究所から

M.マリNZ、R.ヤング、渋谷浩、畠山保男、加山久夫の5名、他に韓国人とアメリカ人研究者5名による約3年間のプロジェクトでした。

その共同研究もほぼまとめの段階に入った1993年の正月明け、横浜校舎のブラウン館に合宿し、それぞれの論文を披露、共同討議を進めていました。その二日目の午後、アメリカから教育宣教師として来日しておられたダグラス・マイケルさん（聖学院大学助教授）がご自分の論文を読み出されて30分ほど過ぎたとき、その大きな体が突然平衡を失い、フロアに崩れてしまいました。テーブルをはさんで丁度向かい側にいた私にはいったい何が起こったのか一瞬理解できませんでしたが、とにかく健康相談所に連絡。看護婦の成沢さんがすぐに駆けつけてくださり、人工呼吸をしてくださいましたが、なんの反応もありませんでした。間もなく到着した救急車に私が同乗し、近くの病院に搬送しましたが、そのときには既に亡くなっていたようです。42歳の若さでした。ご家族への連絡、検死のための遺体の解剖、葬送のあれこれ、ほんとうに嵐のようなそれからの数日でした。そのなかでなによりも辛かったことは、突然愛する者を失った若い夫人とまだ十分に事態を理解できない小さなお嬢さんへの思いでした。また、その直前まで元気に論文を朗読していた方が突然亡くなるのを目の当たりにして、人の命のはかなさを改めて深く実感したのです。

私が本学に就職し、研究所に関わるようになって21年の過程で、マイケルさんのことはもっとも忘れられないことの一つであり、あの一こま一こまが鮮明に思い出されます。幸い、研究成果は1995年、*Perspectives on Christianity in Korea and Japan. The Gospel and Culture in East Asia*として米国のEdwin Mellen社から出版されました。この本には、遺稿となったマイケルさんの論文（"Contemporary Christian Responses to Japanese Nationalism"）が収められ、また、同書はマイケルさんに献呈されています。

（かやま ひさお 所員・文学部教授）